

「自然」の回復力 傷つきやすい自然

月遅れの盆が過ぎで静かとなった北海道の大雪山系を黒岳から旭岳にかけて娘二人と縦走してみた。本州では残暑で三十五度を超える猛暑が続いているが、真夏とはいえ北冷西暑型で北国は二十五度前後、一千坪の頂上付近では十五度ほどの涼しさで、早朝は山小屋の寝袋の中でも寒く十度を割って下界の晩秋だった。

大雪山系の山々はアプロチが長く本州の三千坪級の山に匹敵する厳しさがあり大自然が手つかずに残されている。天上の楽園はハイマツの群落からキバナシヤクナゲが絨毯のように岩場を覆い高山植物の宝のコマクサが可憐な花を咲かせていた。少し低い標高ではチングルマが短い夏に咲いて小人の風車のような実がはるか向こうまで覆っていた。

二日間の山歩きでゴミと出会わなかった。ただひとつある素泊まりの山小屋ですらゴミ箱はなく全て持ち帰りが徹底され、登山者

と山岳パトロールの人たちの地道な努力あってゴミなしが守られている。ただ一つの自然破壊といえば登山路の踏み跡だけ。コマクサは岩に落ちた種から芽がでて花が咲くまで三年以上かかる。ひと踏みの破壊からの回復には気の遠くなるほどの時間が必要となる。

この風景を七年前の夏のイエローストーン公園の大森林火災のできごととの対比で二重写してみていた。東京都の広さを焼き尽くした火災は降雪で自然鎮火するまで五か月のあいだ燃え続けた。そして七年。焼け跡には若草が茂り水牛が群れ、焼けただれた木々からも若芽が燃えて鳥も戻ってきた。老木は淘汰され若い木々が成長し始め、自然のもつしたたかな回復力によって世代交代が見事に図られてきた。自然は「傷つきやすい繊細な自然」と「たたかな回復力をもつ自然」の二面性を備えている。上手に分けて対応するのが自然を壊さずにつきあう策なのだろう。漆黒の空に天の川が浮かび満天の星のあいだに流れ星を見ての感想である。（一九九五年八月二六日）